

熊本県立芦北高等学校 令和3年度(2021年度)学校評価表

<p>1 学校教育目標</p> <p>【教育目標】 「魅力ある人材を育成し、地域の信頼と期待に応える芦高教育の創造と実践」</p> <p>【目指す生徒像】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夢に向かって努力する生徒【 Challenge for your Dream ! 】 ・さわやかな挨拶ができる生徒 ・人の心の痛みがわかる生徒 <p>【教師の目標】</p> <p>ア 生徒一人ひとりを理解し、個性を見つけ伸ばす教育を実践する。 イ 生徒・保護者・地域の期待を受け止め、目指す生徒像の実現に努める。 ウ 「人間力」を磨き、生徒が尊敬し保護者から信頼される教師を目指す。</p>

<p>2 本年度の重点目標</p> <p>【重点目標】 ～「良い学校」に向けて～</p> <p>ア すべての教育活動における「魅力ある人材の育成」の具現化 イ すべての校務における課題解決の推進 ウ より効率的・効果的な教育活動・校務(事務)処理の推進 エ 豪雨災害からの早期の復旧と教育環境の整備</p> <p>【教育方針】</p> <p>ア 地域に学び、学びを地域に返す、地域とともにある学校づくりを推進する。 イ ICTを活用した教育活動を推進し、より効果的な学習指導を実践する。 ウ 目標を高く持ち、チャレンジ精神旺盛な人材を育成する。 エ 生徒自身による主体的、創造的な学習活動、特別活動を推進する。 オ 部活動を推進し、生徒の心と身体の鍛錬と活気溢れる学校生活を実現する。 カ 図書館活用と読書指導による、読む力、考える力、表現する力を育成する。 キ 生活指導を充実させ、基本的生活習慣を確立させる。 ク 生活指導と教育相談の協調により、安心して過ごせる学校づくりを推進する。 ケ 自己肯定感及び他者の個性を受け入れる心を醸成する。 コ 自然との触れ合いや地域との交流をとおして、自然と郷土を愛し大切にすることを育成する。</p>
--

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	特色ある学校づくり	魅力ある学科づくりの推進	令和3年度の入学者(3学科)82名を超える令和4年度入学生を確保する。	学校や地域との連携を更に深め、芦高教育の魅力を地域へ発信し、各科の特色を活かして生徒募集に繋げる。 ICT端末を活用した学校PR動画(YouTube)の制作と配信。	B	農業科は地域と連携・協働した取組や小・中学校との交流活動を行い、林業科は9割以上の公務員合格や国立大学進学など好成績を収め、福祉科は介護福祉士の資格取得やVR疑似体験を導入し理解度が高まった。ICT先進校としてChromebookを活用した授業実践やYouTube動画による学校PR等を行い、魅力ある学科づくりが進んだ。入学者数は、昨年比、8名減少したものの全校生徒数は25名増加した。
	業務改善	校務における課題解決の推進	各校務分掌の最低1つは課題に取組みチームで協働して問題解決を進める分掌組織。 学校行事の見直しと業務の効率化	年間反省をもとに校務分掌で課題解決の取組みを具現化する。町の支援事業を活用したレベルアップ事業と学科の専門性を活かした地域との連携を深める。学年・学科、分掌における個々の経営感覚を高める。新しい生活様式をふまえた行事の工夫と延期・中止の場合の代替案の作成	B	コロナ対策や復旧工事が進む中で、古民家再生プロジェクトや町のレベルアップ事業による地域農産物を活用したケーキ講習やドローン研修など地域課題解決に繋がる取組みを行った。体育大会、文化祭等の時間短縮や行事を精選したことが、より効果的・効率的な学校経営に繋がった。

	働き方改革	時間内での効率的・効果的な校務処理の推進	業務超過時間月平均35時間以内をめざした実勤務時間の短縮と情報伝達システムの有効活用。	長期休業日を除いて、年次有給休暇年間7日以上取得する。ICTを活用して会議時間を短縮する。	B	働き方アドバイザー研修を行い、職員個人や各部における働き方を見直し、業務のスマート化を図った。進路指導や学習指導に対する超過勤務が影響し、平均超過勤務時間41時間、年休取得平均6日となり目標値にはやや届かなかった。衛生委員会による「わくわくWork便」を発行するなどして職員の意識改革を促すことができた。
	危機管理	豪雨災害の復旧と教育環境整備 不祥事根絶の徹底	不測の事態に対応できる機動性の高い学校組織の再編。 不祥事ゼロを目指し、地域から信頼される学校づくりを目指す。	自然災害等における防災行動の確認と避難訓練の実施。 月に2回、芦北高校不祥事防止確認事項を朝礼で読み上げ、不祥事根絶の意識を高める。短期集中型の効果的な職員研修を実施する。	B	月平均1.5回以上の職員研修を行い、うち不祥事防止に係る研修を3回実施した。転入者を始めとする不祥事防止確認事項の読み上げやハラスメント及び飲酒運転防止研修を行うなど、不祥事根絶に向けた職場全体の意識の高揚に繋ぐことができた。
	授業力向上のための取り組み	授業の充実	校外の各種研究授業や講習会に年1回以上参加して、指導力の向上や技術の習得に繋げる。 授業におけるChromebookの活用。	各教科で主体的対話的で深い学びを重視した授業改善を行い、わかる授業の実践に努める。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導力向上と技術の習得及び安全確保に配慮する。 Chromebookを活用した学習保障。 (1人1台端末先行実践校)	B	全教科において教育課程研究協議会(オンライン)に参加し、新学習指導要領及び授業改善、評価等に関する研修を受けた。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導をすることができた。授業でChromebookを活用した共同学習やChromebookの毎日の持ち帰りで学習保障ができた。
学力向上	授業力向上のための取り組み	授業の充実	公開授業週間を年2回、研究授業を各教科年1回、授業評価を年2回実施する。 各教室に設置している電子黒板機能付プロジェクトを有効活用する。	研究授業では、同一学科を対象に専門学科と普通教科で連携して実施し教科横断的な視点に立った取り組みを行う。生徒の授業評価を実施し、課題の分析による授業改善と電子黒板機能付きプロジェクト・Chromebook等のICTを活用した授業を展開する。	A	校内での公開授業週間を年2回実施し、指導力の研鑽ができた。芦北町の総合的な支援で導入した各教室の電子黒板と書画カメラを授業で積極的に活用できた。 1人1台端末先行実践校として3教科でChromebook等のICTを活用した授業を公開し、1教科の研究授業を実施した。
	「確かな学力」の定着	自ら学ぶ学習の奨励	生徒一人あたり年間10冊以上の読書量の確保を目指す。 毎月1回、漢字テストを実施する。 生徒一人あたり1時間以上の家庭学習量を確保する。	朝の10分間読書の充実を図る。 月1回の漢字テストの実施と事前学習に力を入れる。 家庭学習時間確保のため課題を工夫する。 長期休業期間中、課題を出し学習させる。 町の支援事業で導入したスタディサプリを学科・学年及び教科で活用する。	B	考査期間中は朝学習として、それ以外は朝の10分間読書を実施し、朝読書が充実した。漢字テストは、学年が中心となり成果を上げ、基礎学力向上につながっている。長期休暇中の課題は各教科で計画的に出題されている。スタディサプリは進学ゼミや公務員指導で積極的に活用されている。
キャリア教育(進路指導)	進路目標の早期確立	進路情報の収集と活用	生徒の進路選択の情報源となる進路資料室の整備(ICT活用)を推進する。 生徒の利用率2割増を目指す。	細かな進路希望調査、生徒一人ひとりの進路面談を通して、進路希望を具体的に把握し、必要な情報について拡充する。	A	キャリアパスポートや進路のてびき、報告書の提出等Chromebookによる配信に切り替えた。今後もゲーグルアプリを用いて生徒・保護者に対する情報発信の強化に努める。
		進路保障	2月末には、希望進路達成100%を目指す。 全職員による面接指導の充実。	進路希望調査を基にした進路指導や企業求人開拓の実施、進学支援体制の確立や個別指導の充実を図る。	B	国家公務員一次突破率過去最高を達成。小論文や面接等の指導を、全職員で協力して行うことができた。まだ途中経過だが全員進路確定まで順調に進んでいる。

	資格取得の奨励	年間実施計画の提示と推進	生徒一人ひとりが進路実現に繋がる資格取得に2つ以上挑戦できる環境づくりを目指す。	各学科や学年、クラス、教科の協力のもと、資格試験の周知や勧誘を行い、資格取得の学習支援体制を確立する。	B	コロナの影響で検定試験の実施が見送られたものもある中で、各学科・学年の協力もあり、昨年度並みの成果が得られた。
生徒指導	命や人権を尊重する豊かな心の育成	基本的な生活習慣の確立とコミュニケーション能力の向上	夢に向かって努力する生徒、さわやかな挨拶ができる生徒、人の心の痛みがわかる生徒の育成を目指す。	分かる指導、丁寧な言葉による指導を徹底する。学級担任を中心とし、生徒の個性と長所を伸ばす指導を行う。生徒会が主体となった行事運営や委員会活動の活性化を図る。地域や保護者、教育相談部、SCとの連携を密にし、問題解決を図る。	B	各担任をはじめ先生方の普段からの丁寧なコミュニケーションや指導のおかげで、生徒は落ち着いた学校生活を送ることができている。一方で、挨拶の声が小さい生徒やなかなか自分をアピールできないおとなしい生徒も多くなっている。職員間のコミュニケーションを増やし、情報共有していく必要がある。
	自ら考え、学び、夢に向かって努力する主体的な態度の育成	社会規範意識の醸成と安全安心な教育環境の整備	ルールや校則を守るための判断力と自立心の向上を目指す。SNS等によるトラブルを防止する。交通違反・交通事故0を目指す。校内・外での二輪車施設率の向上を目指す。特別指導件数6件未満を目指す。	関係機関と連携し、学びの機会を確保する。情報モラル教育・交通安全教育等についての講演会等を計画する。交通委員による二輪車施設呼びかけや登下校指導、バイク通学生集会を実施する。	B	全校集会等が実施できず、生徒の規範意識の醸成や学校の雰囲気作りが非常に難しかった。その中でも芦高祭などの学校行事では生徒会が主体となって活動し、全校生徒が準備段階から楽しそうに取り組んでいた。薬物乱用防止・交通安全・情報モラル教育はリモートで実施することができた。しかし、SNSを通じたトラブルや交通マナーの苦情等については校内・外からも報告されており、継続して指導する必要がある。また、自転車のツーロックについても今後の課題である。 ※特別指導0件(11月末現在)
人権教育の推進	推進体制の確立と研修の充実	教職員の実践的指導力の向上	全職員が校外研修会へ1回以上参加し、意識向上と指導力向上を図る。	職員への研修案内と参加呼びかけを定期的に行い、全職員校外研修に参加する。LHR等での指導力向上に向けた事前研修の充実を図る。	B	コロナの影響で校外研修の多くが中止となった。Web研修が増え、参加呼びかけを行った。校内研修は年間計画に従い実施することが出来た。LHR事前研修を行うことができた。
	すべての教育活動を通じた取組の強化	課題を抱えた生徒への支援と対策	各校務分掌と連携を図り、生徒の実態を把握し、いつでも、どこでも、すぐに対応できる職員の体制作りを行う。	担任・学年会・教科会・特別支援教育・教育相談の各担当者との連携を図り、研修をとおして全職員の共通理解を深め実践力を強化する。	B	教育相談部に所属することで、特別な支援を必要とする生徒、様々な課題を抱えた生徒の情報収集ができ、人権教育の視点に立ち支援について考えることが出来た。
	命を大切にすることを育む指導の充実	命の大切さを実感させる教育の推進	命を大切にし、自尊感情を高め、お互いを理解し合い、認め合う心を育てる。	全校集会等で命の大切さに関する全体講話を実施する。教育活動全体を通して全職員が自分の言葉で語り、生徒と共に互いの信頼関係を築く土台作りをする。	B	全校集会で校長講話を実施した。SNSは使い方間違っていると取り返しのつかないことに繋がることを学ぶことが出来た。
いじめの防止等	いじめ根絶の啓発・推進	いじめを絶対に許さない学校づくり	人の痛みがわかる生徒の育成。いじめに関する問題行動の根絶を目指す。全クラスで生徒面談を学期1回以上行い、情報収集と共有に努める。	いじめ防止に関する講話を実施して、生命や人権を大切にすることを育む。「目指す生徒像」「いじめを許さない宣言文」を教室に掲示し、啓発に努める。	B	12月に人権週間を設けプリントの配布と人権を確かめる機会を作った。人権集会では、SNSのトラブルや障害者の人権など生徒に身近にある人権を考えさせることが出来た。いじめを許さない宣言を唱和することで生徒一人一人の自覚を促した。

	いじめの防止と早期発見	いじめ防止や早期発見・早期対応	心のアンケートを年3回実施して、いじめの実態を把握し、対策を早急にする。いじめの把握においては、関係機関と連携を密に取り合い早期対応に取り組む。	心のアンケート結果を基に、実態把握に努める。(年3回のアンケート実施) いじめ防止等対策委員会を年3回実施し、外部専門家から指導・助言を仰ぎ、取組についての検証を行う。	B	各学期1回心のアンケートを実施し、いじめを早期発見することが出来た。いじめ防止対策委員会では、専門委員の先生から指導助言をいただき、いじめ防止、仲間づくり等への示唆をいただくことが出来た。
教育相談	特別支援教育	支援対象生徒について早期の支援開始	保護者、中学校、職員から得た情報を迅速に集約する。生徒理解の職員研修等を学期に1回行い、全職員の共通理解を図る。保護者の理解を得て、支援を開始する。	「保護者の気づき」「中学校訪問記録」で新入生の実態を4月初旬までに把握する。「気づきメモ」週間、教科担当者会をふまえ、個別の教育支援計画を作成し、生徒理解研修を実施する。	B	新入生の実態把握に努め、年度初めに生徒理解研修を行い、職員間での共通理解を行った。新入生の支援対象生徒についてはコーディネーターが個別の教育支援計画・指導計画を作成し、学年会等で検討し、その後の生徒理解研修に結びつけることができた。
		支援対象生徒の進路保障	支援対象生徒(3年生)の進路決定100%を目指す。1・2年生の進級を目標に、あらゆる場面で支援を行う。	担任、進路指導部、教育相談部、関係機関と連携を取り、保護者の理解を得て進めていく。	B	進路指導部と協力し、支援対象の3年生については関係機関と連携を取りながら就職支援を行うことができた。
	教育相談	生徒の実態把握と課題解決	欠席が続く生徒、その他精神面への支援が必要な生徒の課題解決を図る。職員が一人で抱え込まないための相談体制の充実を図る。	定期的に教育相談校内委員会を開催し情報交換を行う。スクールカウンセラーを活用し課題解決に向けた方策を検討する。必要に応じて医療機関や福祉事務所等と連携を図る。	B	教育相談部内で情報交換を行い、生徒の状況把握に努めた。スクールカウンセラーにはカウンセリングのほかに職員への助言、必要に応じて医療機関等と連携を図ってもらった。教育相談校内委員会は実施していないが、担任間や学年会等で情報共有ができた。
地域連携 (コミュニティ・スクールなど)	総合型コミュニティ・スクールをはじめとした地域連携の体制づくり	平常時の地域連携体制づくり	学校運営協議会時に、平常時における地域連携に関する具体的方策を協議する。	佐敷小・中学校及び芦北支援学校本校・佐敷分教室との交流活動、乙干屋地区住民の参加型交流活動の検討。	B	総合型コミュニティ・スクールに移行し、小中高連携による学校支援活動の活性化に向けた意見を参考に、地域に学ぶ交流活動の実践を行うことができた。
		災害時の地域連携体制づくり	学校運営協議会を2回開催し、災害時における地域連携の基本計画を作成する。	町との連絡体制、地域住民の受入、避難所運営、災害経験を活かした地域合同防災訓練への参加等の検討。また、町の方針に基づき、コロナ感染対策を考えた避難所運営について検討する。	B	昨年の豪雨災害に伴う校舎の工事により、避難所運営計画の変更の周知を協議会で行った。コロナ禍により地域合同防災訓練は実施できなかったが、学校単独の訓練(洪水・土砂、火災、地震・津波)の実施と防災教育講話の開催を行い、連携できる体制を整えることができた。
		芦北町芦北高校総合支援事業の有効活用	芦北高校総合支援事業を有効に活用する。	各事業の趣旨を踏まえ、十分な効果が高まる活用を実践する。特にレベルアップ事業の活用と、生徒の進路決定につながる活用に力を入れる。	A	電子黒板の導入と共にICT特定推進校として実践的かつ専門的な学びの向上に繋げることができた。特にレベルアップ事業でのスタディサプリは生徒のスキルアップと進路実現に向けて効果的取組みであった。

4 学校関係者評価

- (1) 学校長の経営方針が職員へ浸透しており、協力体制ができています。
- (2) 町内唯一の高校としての立場・役割を十分理解しより良い未来に繋げていこうという意思が感じられる。
- (3) 総合型の対象学校、特定推進校としての役割もあるのでもっと色々な人々を巻き込んでより良い未来を創造していく。
- (4) 中高連携をさらに強め、芦北高校を志願する生徒を増やせるよう努力していく。
- (5) 町当局の高校への支援状況ができており、生徒を地域と学校で育てる現状がよくわかった。
- (6) 地域連携して活動計画を立て、メンバーの決定と話し合いの時間を定期的に行っていく。

- (7) 若い人材が地元に残ることは重要な課題であり、過疎化と高齢者の増加が懸念されるなかで芦北高校の存在は大きい。
- (8) 地域の文化施設や史跡、工業・農業施設や漁業、福祉施設などに従事する方々から専門的な話しを聴き地域を学ぶ。
- (9) 過去の町内外の入学者比率や町内出身中学校の偏りを鑑みると、入学者募集施策において強化すべき点が見えてくる。
- (10) 生徒たちがよくあいさつをしてくれ、明朗活発な生活態度で、礼儀正しく育成されている。
- (11) 若い人材が地域に残り、地域活性とともにこれからのIT社会に対応できるICT教育に期待している。
- (12) 災害時を想定して学校と地域と合同の避難訓練を行い、学校と地域一体型の防災体制を構築していく。

5 総合評価

- (1) 魅力ある人材の育成をめざした“良い学校づくり”を重点目標としコロナや災害復旧工事等への対応と共に学校・保護者・地域が一体感をもって取り組み「地域の信頼と期待に応えられる芦高教育の創造と実践」に繋がる教育活動ができた。
- (2) ICT特定推進校としてChrome BOOKによる町の支援事業を活用したオンライン講座や公開授業など、「わかる授業の実践」「主体的で深い学び」に繋がり、教科の特色を活かした「学校情報科優良校」に認定された。
- (3) 今年度から総合型コミュニティ・スクールとして地域と連携した学校経営や防災対策等について、運営協議会からの意見を集約したことで、学校運営上の見直しをすることができた。
- (4) 生徒・保護者・職員アンケートの9割以上がA・Bの回答を得ることができ本校教育が肯定的に受け止められている。
- (5) コロナ禍による修学旅行、体育大会、授業参観など、行事が中止・変更され、保護者の参加する機会が減少した。
- (6) 卒業生や入学生アンケートによるデータ分析に基づく広報活動や学校HPによる魅力発信をすることができた。
- (7) 働き方改革では、オンラインでの外部講師を招いた職員研修や会議の削減・時間短縮など、年間平均超過勤務が39時間となり教職員の意識改革、業務のスマート化に繋がっている。
- (8) 地域課題をテーマとしたプロジェクト研究活動は、県内外で高い評価を受け、レベルの高い学習ができています。また、学校農業クラブ全国大会の農業鑑定競技では最優秀賞（日本一）を受賞した。
- (9) 3年生の進路活動が順調に進み12月中に就職内定率100%を達成し、公務員試験では希望者全員が合格し過去最高であった。公務員対応型のゼミやスタディサプリ、キャリアサポーター等の継続的取り組みが成果に繋がっている。
- (10) 人権教育として「水俣病学習のためのフィールドワーク」「心のアンケート」を実施したことで、生徒の現状把握といじめの早期発見、人権意識の向上に繋がり、生徒・教職員の理解を深めることができた。
- (11) SCの支援により、個別の教育支援や保護者等への継続的カウンセリングを実施することができた。

6 次年度への課題・改善方策

- (1) R4年度新教育課程に伴った学習評価基準の在り方と授業改善等について検討し、教育活動の客観的な効果測定を行う。
- (2) コロナ禍の影響を最小限におさえた、学校と保護者が顔を合わせてスムーズなコミュニケーションや信頼関係づくりが育める環境にしていく。
- (3) 災害復旧工事の完了に伴い、教室の活用や教室配置、時間割編成など、計画的に行い効果的学習に繋げる。
- (4) 芦北町の支援事業と共にChrome（オンライン）の有効活用やネット環境の整備などICT教育をさらに充実したものとし、魅力ある人材の育成と生徒募集につなげる。
- (5) 働き方改革の観点から各種行事や会議等を見直し、効果的で効率性の高い研修等を設定する。
- (6) 農場日直について生徒数の変化等も推測しながら、本当の意味での働き方改革になるよう施設の自動化を進めていく。
- (7) 公務員合格や大学進学等に向けたスタディサプリやICTを活用した授業の展開及び進路指導。（職員の負担軽減）
- (8) 部活動の設置数を見直し、数年計画での取り組み・改善を行い、顧問教師の体制づくりを整える。
- (9) 校内文書等における押印の省略や連絡手段のデジタル化を進めていく。
- (10) 一人一台端末を活用した進路情報「ポータルサイト」の設置や「進路のてびき」を電子化するなど、進路業務の整理と効率化を推進する。また、オンラインを活用した校内外のガイダンスへの参加など、進路指導に役立てる。
- (11) 高校魅力化に向けた学校パンフレット作成の円滑化、学校HPブログやTwitter発信が偏りなくできるシステム作り。
- (12) コロナ禍における介護実習や巡回指導の在り方等を検討し、実習先の確保、実習先担当者との連携強化。
- (13) 各学科の取り組みとSDGsを組み合わせ、教育的効果や学校の活性化をさらに図る。